

遼の古都を尋ねて

文學博士 鳥居龍藏

一

予は昭和五年八月二十一日に東京を出發して、同年十二月二十一日まで約四ヶ月間、滿洲及び東蒙古各地を旅行し、斯學上の探査をした。その目的は、主として同地方に於ける有史以前の遺蹟遺物、及び遼代の文化を調査するにあつて、東邦文化學院東京研究所から派遣せられて赴いたのである。こゝには其の中の遼代の文化のみについて専ら申し述べたいと考へる。

此の行、予は妻きみ子及び寫眞師三好君を同伴した。なほ其の他に、南滿洲鐵道會社の鄭家屯公所長菊竹氏の好意によつて、同所員淺野・小平等諸氏を大に煩はしたことは、予の切に感謝する所である。

最初に先づ滿洲地方を調査して、それから通遼の方向に出で、更に轉じて、阿魯科爾沁、巴林等の蒙古地方を探査した。是等の地方は日本人の所謂東蒙古で、廣く興安嶺及び西喇木倫の流域を含んでゐる。予は二十餘年前にも約二三年の間に互つて是等の地方を踏査し、其の後にもなほ小探査を試みた事

があるが、こゝには専ら今回の旅行に於て踏査した地域に限定して述べる事とする。

一體、遼とは契丹の事で、遼人即ち契丹人は、東胡民族に屬し、鮮卑、烏顔等と殊に深い關係を持つてゐる。其の發祥の地は西喇木倫及び老哈河の流域であつて、それが、唐末から五代にかけての間に、遂に一國家を組織するに至つたのが、即ち遼である。此の遼の始祖は有名な阿保機であつたが、其の後に遼は、北宋と事を構へ、北方諸族を征服し、東は渤海を滅ぼし、西は突厥と結んで、こゝに堂々たる一大王國を西喇木倫の流域に開展したのである。斯の如く當時の遼は、四隣に威を張つて頗る優勢を示してゐたから、彼等自らは其國を呼ぶに王國を以てせず、敢て皇帝の國を以て任じてゐた。随つて遼は其の國富の點に於ても甚だ盛であつて、世宗の頃には、北宋との戰に威を示して北宋から貢物を取り、非常に裕福な國家生活を營んでゐた。此の國は當時、東の方朝鮮にも手を伸ばして、高麗と關係してゐたから、間接に我が日本文化の上にも影響を及ぼした事は當然想像せられる所であるが、其の時代は、略ぼ平安朝の初期から、藤原氏全盛時代に互つてゐる。

二

予がこれから述べようとする所は、此の皇國遼の遺蹟に就ての話であるが、遼は前述の如く元來契丹人の國であるから、随つて其の古都のある處も、西喇木倫流域の所謂る巴林蒙古であつて、此處に、ポ

ロホトンと稱して大きな土城が残存してゐる。此處が即ち遼の上京である。遼の盛時には、此の邊を中心として、西喇木倫の南、縣の東南方に中京があり、なほ更に其の南方、即ち今日の北平の地には、南京があり、陝西省の大同府には西京、現在の滿洲遼陽の地には東京が置かれてゐたのであつて、是等の地方にも、今なほ當時の土城の址が遺つてゐる。斯ういふ風に東西南北中の五京があつて、各其の附近を領地として支配してゐた當時の遼の領域は、東の方では、今日の滿洲の黒龍江省邊にまで及び、朝鮮の如きは其の附庸國として見られてゐた位で、朝貢使が度々派遣せられてゐる。それから北の方では、バイカル湖の南方あたり迄も勢力が及び、西の方は今日の支那トルキスタンの土耳其民族にまで到り、又西藏の北、青海方面などにも關係を持ち、南は南京を土臺として其南にまで勢力を伸ばし、北宋との間には兄弟の約を結んで年々朝貢せしめてゐた。斯う云ふ有様で、遼が勢を示した當時は支那でいふと北宋、日本でいふと平安朝から藤氏の全盛が衰へる頃に到るまでの間で、一般歴史上、殊に又文化史上注目に値するのである。

斯ういふ風に考へて來ると、當時の東蒙古は、今日の如く開けぬ土地では無く、相當の文化を持ち、又四隣に對して政治上の權力を揮つてゐた事が分るのであつて、當時の北宋文化を研究する上に於て、延いては又、我が日本の藤原時代文化を研究する上に於て、政治的にも宗教的にも、又、一般文化史的

にも最も注意に値する多くのものが存在するのである。殊に遼の黄金時代とも云ふべき聖宗から仁宗・興宗・道宗などの治世は、恰も我が國の藤氏全盛期で、道長から頼長あたりと時を同じうしてゐるのであつて、此の點から見て、非常に面白いと思ふ。そこで予がこれから述べようとするのは、上述の遼の領域中、中心地たる上京を中心として其の附近に關する話である。

三

先づ上京の地方状態から順次に話を進めて行かう。

既に述べた通り、當時遼の都城は五つあつたが、其の中で皇居のあつたのは上京であつて、これは西喇木倫の北方に存在した。此の都城の地方は、別に林東といふ名で呼ばれてゐる。これは直接西喇木倫に臨んでゐる所のやうに想像されるが、實はシラムレンではなく、ウルジムレンといふ川の畔で、そのウルジムレンになほ二の小溪流が流れ込んでゐる處に當つてゐるのである。土城の大きさは、我が日本の里數で云つて、略ぼ二里半程の周回で、高さ一丈五尺、厚さ六尺餘の土壁を以て廻らされてゐる。これは土煉瓦、即ち土を煉瓦形に造つて日乾しにした乾埴を以て造つたもので、各方面に城門を開いてゐたのであるが、今日では其の西門の址だけが、最もハッキリとわかつてゐる。土城全體の形は、一寸見ると方形のやうであるが、よく見ると不規則な八角形を成してゐて、其の中には、當時の皇居の址、役

所の蹟、寺の蹟、炊事場のあとなどが遺つてゐる。此の城は遼の太宗が渤海國を征服して後に造つたものであるが、其の後に段々と規模を大きくして行つたらしい形蹟がある。予が二十餘年前に此の城址に尋ね寄つた時には、礎のあとに色々な物が昔のまゝに遺つてゐるのを見たが、今日では此の城の北方に林東縣と云ふ支那の縣が出来て、南方から支那人が移住して來たので、石などのやうな建築に入用な物は争つて掘り取つて行つたため、多少形なども壞されてゐる。全體支那政府で、數年前に新縣を設置した當時の意圖では、此の城中に縣を造る豫定だつたのであるが、支那人は(蒙古人でもさうであるが)一般に城の中へ縣などを設けることを嫌ふ風があり、土城の中へ住むのは縁起が悪いとして、誰住む者もない爲に、數年後の今日、なほ未だ空地のまゝに放置されてゐるのである。そんな關係上、多數の支那人が移住して來た後にも、大體に於て城の舊態は保たれてゐるのであるが、石垣を築く必要上、勝手に臺石などを運んで行くし、又、土壁は良質の粘土を原料とした磚で作られてゐるために、それを突き崩しては運んで行つて自宅の土塀にするといふ風で、片端から突き壞したから、南方の城壁などは大分崩されて了つたのである。それで、二十餘年前に見た姿と比べると、多少破壊の手が及んでゐるが、大體は昔のまゝで、殊に面白いのは、城内稍南寄りの所に一丈以上もあらうかと思はれる大きな石佛が立つてゐる。此の石佛は、支那人及び蒙古人の話に依ると、毎夜必ず城の周圍を巡廻してゐるのださうで、

偶々城内に住宅などを設ける者があつても、翌日は必ず其の石佛のために、城外へ投げ出されて了ふのを恐れて、城内には誰も住まないのである、と云ふ神秘的な説話が残されてゐる。恐らくそれも今に城内には住む者のない一つの原因であらう。兎に角、城内の遺物遺蹟が多く破壊せられてゐる中で、此の石佛のみは今尙儼然として立つてゐるが、これは恐らく昔契丹が榮えてゐた時代からの残り物に相違無からうと思はれる。尙これに就て遼代の宗教文化史上非常に面白い事は、此の石佛が脚下に蓮瓣を踏まへてゐる事である。此の様子は、彼のロシアの探検家カズロフが、ハラホトで得た佛像の形と酷だよく類似してゐる。蓋し同類の物であらうと考へられる。

それから又、此の土城内の建物の蹟には、陶器・古錢などが散亂してゐる外に、瓦の破片などもある。瓦の中には緑瓦の稍白みが、つてゐる物があるが、これ等は王者でなければ用ゐられぬもので、調査上面白い材料である。予はそれ等に就て多少のコレクシヨンをも行つた。

遼史を見ると、遼の盛時には、何處に何の役所があつたとか、又、某々寺院が何處にあつたかと云ふやうな位置を多少跡づけることが出来るが、それ等の記事を現在の東蒙古地方に引き當てて考へて見ると、相當得る所がある。遼史には、遼の皇都は、元契丹族の大賀子のあとで、其處には彼等の墳墓があると云ふ事を記してゐるが、予の今回の調査でも、土城の西北部には丘陵があつて、二三の古墓が残つ

てゐるのを發見した。それ等は多く發掘されてゐるが、遼史に所謂大賀子の墓とは之を指すのであらうと思はれる。中には石棺なども掘り出されてゐるが、これ等も其の頃の物であらう。遼の當時に北宋の人が此の皇城を訪うた旅行記も大分残つてゐるが、それに當て嵌めて考へて見ると、中々面白い。例へば旅行記の或る物には、此の皇城に入るのに西門から入つてゐる。そして門を入ると直ぐに店屋などがあつて賑やかだと書いてゐるが、其の西門のあとは、今も完全に残つてゐる。それで單なる一地點のみに就ても、追想の點は限なく擴げられるのであつて、此の皇都の遺蹟遺物の一つ一つは、何れも皆契丹研究上の最も大切な基礎を成してゐるのである。

此の土城から西北に當る所に遼の太祖の陵があるが、これは古來西樓と呼ばれてゐる。勿論古くは東樓と相對して存在したものであるが、太祖が崩じてから陵としたのである。こゝに面白い石室が残つてゐるが、これはドルメンを遼代に作り直したものであらうかと思はれる。此處には其の他にもなほ、建物の蹟などが残つてゐて、瓦の破片などが散亂してゐるが、こゝから又、更に西北に行くと、慶州城といふ城の跡がある。これは色々な點から觀て、非常に面白い處であるが改めて後に説く事にする。

四

此の遼の上京の北と南との丘陵の上には、塔が兩々相對して各一基宛建てられてゐる。蒙古遊牧記

には、遼の上京内には三塔存在すと書いてゐるが、今日は南北二塔の聳立を見るのみで、城内には外に
 塔塔を見受けない。しかし稍南寄りの處には塔塔のあつた蹟らしいものが見受けられるから、之を加へ
 れば數の上では確に三基に成るが、しかし南北の二塔は城外にあつて、只一基だけが城内にあるのであ
 る。此の南北二塔の中で、北塔の方は頗る破損してゐるので、外面には何等の裝飾圖様も認められない
 が、南丘の上にある八角の塔は、非常に面白いもので、それには佛菩薩、天人、迦陵嚩伽等を附け、
 又、五智の寶冠を頂いた大日如來の像を現してゐるなど、密教の佛が濃厚に示されてゐるばかりでなく、
 又、道教關係の玉皇像も見られるし、シャマンのシンボルたる鳥を表象したものもあつて、兎に角、遼
 の宗教が決して單一なものではなく、一種の混合宗教であつたことを語つてゐる。

是等の塔の外面に於ける圖様は、彼等遼代人の文化を知る上に於て、非常に面白い題材であると思
 はれる。

斯の如く遼の上京の中には寺院があつて、又、北方の丘陵上には佛塔が立つてゐるといふ事は、學問
 上非常に興味のある事實である。

又、此の上京の南塔の立つてゐる所から、今少し登つて行くと、山上には皇居を望んだ状態に於て、
 三つの廟の跡が残つてゐる。三廟とはアルグイブルジョウ、ウブルグイブルジョウ、ハバチフ廟の三で

ある。これは花崗岩の山上で非常に閑靜な處である。アルグイブルジョウの前には、自然の岩石門が出来てゐるが、其處には二王像が相對して一對、牛肉彫に彫られてゐる。又、其門から少し奥へ入ると、涅槃像が岩窟の中にあつて、側には羅漢や菩薩たちの像が彫られてゐる。此の涅槃像は螺髮の釋迦で、肉髻がついてゐるが、其の形狀なり彫刻の工合、菩薩などの様子は、ちやうどヘリオが千佛洞で見たとの非常に似てゐる。これは當時此の種の涅槃像が廣く行はれた爲であつて、上京では此の廟だけであるが、別に中京にも亦、同じやうな涅槃像が遺存してゐるのである。それから又、二王像のある處と、此の涅槃像のある岩窟との間には、金剛界の大日如來の石佛が、毀壞され乍ら残つてゐる。なほ其の外にも羅漢像などの石佛などがあつて、相當佛敎の盛であつたことを語つてゐる。但し大體に於て、密敎臭いにほひが濃厚である。石佛の外に、尊勝陀羅尼を書いた石碑なども残つてゐるが、此の碑文には、彼の西域から陀羅尼を將來した事の序文が全部刻せられ、同時に又其の翻譯文も載つてゐて、非常に面白いものである。なほ尊勝陀羅尼や光明眞言など當時遼人が盛に用ゐたものが、あちこちに残つてゐるが、是等も一の例として見られるであらう。此のアルグイブルジョウは、本來遼代のものであるが、現在には蒙古人の喇嘛敎寺院が出来てゐて、其の外に蒙古僧の住宅なども多くある。随つて遼代の遺物である羅漢像などは投棄せられて、其の代りに喇嘛佛が祭られてゐる。

それから此のアルグイブルジョウの東南方、峯傳ひで行ける處にウブルグイブルジョウがあるが、こゝにも尊勝陀羅尼や色々な佛幢などが残つてゐる。今では此處も喇嘛廟に成つて了つてゐるが、古い宗教の遺物も少しは残つてゐる。予の發見した尊勝陀羅尼幢は八面のもので、正面には佛頂尊勝陀羅尼幢と刻し、其の左右には、清淨法身毗盧遮那佛、圓滿報身盧舍那佛、千百億化身釋迦牟尼佛の三佛を刻し、其の他東西南北の四方には、各光明雷王の名を掲げて刻してゐる。是等は漢文で書かれてゐるのであるが、彼等遼人の當時の宗教を知る上に於て面白いものであると思ふ。なほ其他にも陀羅尼經を書いたものなどが色々あるが、其の臺座の所には、或は佛菩薩、或は天人、迦陵嚩伽、鳳凰、龍等を刻し、當時の時代的意匠を示してゐる。そして我々日本人にとつて甚だ面白い事に、是等の圖様は宇治の平等院或は奥州の中尊寺のそれに酷似してゐるのである。時代から云つても、これは日蒙同時代である。

次にハバチフ廟も、アルグイブルジョウから峯傳ひで行ける所にある。只位置は前者と反對で、西南の方向に當つてゐるが、こゝもやはり今は喇嘛廟に成つて了つてゐる。昨年盜賊が押入つて、喇嘛僧が一人殺害された上、建物に放火されたので、大部分は殆ど痕跡も留めなく成つて、只僅に礎石などが遺つてゐるに過ぎない有様であるが、此處にもやはり陀羅尼幢が見受けられる。

斯ういふ風で、此の邊の山の中には、遼代にまだまだ多くの寺があつたらしく、隨つて此の山は、恰

も五台山のやうな位置を北方佛教史上に占めてゐたのであらう。それはアルグイブルジョウ附近にある碑文に尊勝陀羅尼序文を刻してある中に五台山の事を引いてゐるのと同じ意圖であつたらうと思ふ。山の直ぐ下は遼の皇居の蹟である事から觀ても、其の鎮護の爲といふ意味が十分含まれてゐたのであつて、恰度我が國の比叡山のやうなものであつたに違ひない。是等は遼の研究上最も注意を要する事で、同じ考が、遼にも、北平にも、日本にも同時に行はれてゐたものと私は見たい。殊に遼は、日本の考と符節を合はせてゐたやうである。今迄の解釋では、一般に密教は支那で滅び去つて、それを弘法大師が悉く日本へ傳統的に持ち歸つて了つたやうに云ひ、天台の方でも亦、支那密教は之を台嶺に傳へたとしてゐても、恰も密教は殆ど全く日本へ來て了つたやうに考へられ、其の後の支那の密教はどう成つたかに就ては、餘り多く觸れるものがないやうであるが、しかし乍ら現に西域の千佛洞其他には、密教の諸佛菩薩が残つてゐるのを見ると、密教は日本への傳來後も猶確に大陸に蹟を留めてゐたのであつて、既に述べた所によつて、長城の北にある遼には、それが盛に行はれてゐた事が知られるのである。其の事は、密教關係の經文を彫り込んだり、又、陀羅尼幢、碑文などが現に残つてゐるのみならず、大日の金剛胎藏兩界の考へもあつた事が、實證されるので明らかである。して見ると、密教は日本のみならず、後には契丹の方にも傳はつて行つた事がわかるのである。北宋も後には禪宗が盛になつて壓倒的な勢を示した

が、少くとも遼の亡滅する頃までは、禪風の材料は乏しいのであつて、甚だ多く密教が行はれてゐた事が認められる。これは甚だ注意を要する點で、而も斯の如く遼代に密教が行はれたといふ事は、後に元代に至つて喇嘛教を承け繼いだ先驅を成してゐるやうに思はれる。

五

前に慶州の事を云つたが、此の土城を見ると、門内には宮殿の址があり、又、寺の址、其の他種々の遺蹟があり、碑文や八角幢なども残つてゐる。ところが、其の六角幢は白く塗つてあるので、蒙古人は此の場所をチャガン・サバラガ(白幢)と呼んでゐる。此の白幢の面白い點は、各面に執金剛神、羅漢、天人、迦陵嚩等を畫いてある事で、不思議に此處では佛菩薩の姿が現されてゐない。執金剛神は甲冑を鎧うた姿で、それが四面に現され、他の四面には象又は獅子によつて寶物を運搬してゐる所とか、龍王が寶物を獻じてゐる所とかの圖様が示されてゐる。是等は何れも當時の遼を研究する上に於て面白い材料であると思ふ。そして又其處には鏡が掲げられてゐる。これは今猶残つてゐるものと、既に取り去られてゐるものとあるが、斯ういふ風に鏡を幢の外面に掲げる事は滿洲に於ても認められる所である。

此の慶州から三十清里ほど北へ行くと、其處には三つの陵がある。それを見るためには、チャガムンと云ふ川に沿つて上つてゆかねば成らぬ。慶州には喇嘛僧の家がある外に、蒙古人の住宅も少しはあ

るが、此の三陵墓のある邊へ來ると、もう人家は一軒もなく、右を見ても左を見ても只淋しい山の中で、陵墓は麓から稍少し登つた平地を利用して造られてゐる。後の方は何れも皆巖々たる岩山で、それが如何にも莊嚴な感じをさせる。蒙古人は此の陵墓の所在地をワールマン(瓦の砂丘)と呼んでゐるが、其の名の如く、附近には、陶器や瓦の破片が多數に散亂してゐる。そして、陵墓の在る處から下方へかけての砂丘には、柏、樺等の雜木が林相を呈してゐる。三つの陵墓の中で、東の方にあるのは興宗陵、中央にあるのが盛宗陵、西にあるのが道宗陵である。何れも遼の黄金時代のもので、内容外觀共に堂々たるものであつたらしいが、後に金が遼を陥れた時にも多少は發掘されたであらうし、其後も度々災禍に罹つた形蹟がある。現に予が行つた約一ヶ月前にも、熱河から來た支那人が、大がかりの發掘をして、陵内から何物かを持ち歸つたと云ふ事であつた。予は、此處へ着くと、早速テントを張つて調査に着手したが、何よりも困つたのは近くに水のない事で、水を得る爲には、遠く砂丘を下つて谷川の流れてゐる處まで行かねばならなかつた。

三つの陵墓は、悉く皆地平線下に設けられ、煉瓦を以て築かれてゐるが、其形は何れも穹窿形で、上方では圓錐形に成つてゐる。そして而もそれは一個の穹窿ではなく、幾つもの穹窿が繋がつて一陵墓を形成してゐるのである。即ち真中に一つ、左右前後に各一若くは二の穹窿があつて、總計七個の穹窿か

ら成り、其の間には何れも廊下が續いてゐるのである。又、正面入口は、瓦葺で、宮殿の形に成つてゐて、金銀五彩を以て彩られてゐる、其の中でも、最も東にある興宗陵には、今なほ完全に古い色彩が残されてゐる。なほ陵の内部はすべて壁畫で飾られてゐて、其處には金銀五彩を以て彩られた人物の姿が描き出され、天井には、牡丹、或は寶相華、鳳凰、龍、其他の模様圖様が畫かれ、中央の室には、四季の山水が實に美しい筆致を以て畫かれてゐるが、是等を見ると、遼代には、如何なる人物畫、如何なる山水畫が行はれてゐたかを明らかに知ることが出来るのである。從來の繪畫史では、南宋畫の材料が非常に多く出てゐるのに對し、北宋畫の材料は極めて貧弱であつて、今日僅に残つてゐる北宋畫としては、只徽宗の鶉、桃に鳩等が確なものとして算へられるに止まり、他は殆ど眞僞不明とされてゐる有様であるが、是等の陵墓内には、明らかに興宗時代のデータが示されてゐる雄大な山水畫があり、人物畫も亦確に同時代の物が畫き残されてゐるのである。是等は當時に於ける遼と北宋との間の國交關係から見ても、北宋の畫が遼へ流れ込んだことを語るものであるが、當時遼の皇帝の側近貴族の間には相當の名畫家が多く出てゐるのであつて、隨つて描出されてゐる山水も南方揚子江あたりの山水ではなく、ワールマン附近、興安嶺附近の丘陵を畫いた山水畫と思しいものが多きを占めてゐる。又、それ等の山水畫及び人物畫を注意して見ると、それは確に五代あたりの傳統を引いてゐるもので、南宋あたりの墨色を尊ぶ畫

風ではなく何れも嚴格に、正しく、着色を施されてゐる。予が特に面白いと思つて見たのは是等の點であつて、此等は材料の乏しい北宋時代の繪畫史の上に、一つの光明を與へるものであると思ふ。天井の模様なども、我國の平等院を聯想させるもので、隨つて我が藤原時代美術史との比較の上にも、面白い題材を提供することが少くない。又、特に山水畫に就て見ると、其處に表現されてゐる山の輪廓及びうねり方の和らかな點、之に配せられてゐる動物又は植物の有様は、土佐繪の古い所に似てゐる。是等の點から考へると、今まで土佐繪は日本獨特の物の如く言はれて來たが、實は五代から北宋へかけての畫風が、藤原時代を通して來てゐた結果であらうかと思はれる。又裝飾模様なども、日本で起つたものやうに云はれてゐるが、これもやはり、五代から北宋へかけての畫風の影響を受けてゐるのではないだらうか。

興宗以外の二帝陵は、興宗陵に比べると、餘程破損してゐて、壁畫なども剝落し、殆ど痕跡も認められない位に成つてゐるが、道宗陵の入口の處の廊下だけは、僅ながら佛を留めてゐる。これで、三陵は何れも皆、立派な壁畫を具へてゐたことが斷定される。

それから又、陵の内部には防水の裝置が施されてゐる。そして、若し何者か濫に發掘しようとするれば、陵内に水が出るやうな施設に成つてゐたらしく、世宗陵の或る室の如きは、水が充滿して、中には

天井まで達してゐる所さへあつた。次に屍體の葬り方は、真中に棺を置いて、其の側には、木偶・犬などを、やはり埴輪を立てるやうな式に列ねてあつたらしく、其の形跡が明らかに残つてゐる。又、中には碑もあつて、碑文には明らかに何々皇帝の墓と書き現されてゐるが、葬られてゐるのは決して皇帝一人ではなく、皇后もあれば、殉死者もある。之に就て注意に値するのは、壁に畫かれてゐる人物畫が何れも等身大で、且それぞれの個性が現されてゐる事で、身長の如きも高低様々あり、容貌も一々相違してゐる。そして個々の人物畫の傍には契丹文字で、一々姓名が自署してある。これは明白に、人物畫の主人公等が、何れも殉死者たることを想像させるものである。

陵墓は、すべて入口を塞ぎ、立派に堅牢に造つてあるが、而も發堀に備へて、前述の如く之を地平下に設け、其上をタ、キで固めて、更に又其上から土を盛りかけ、容易に發堀の手の及ばぬやうに入念の施設をしてゐる。

是等の陵から七八丁を隔つた前方には、陵の方に對して佛幢が二つある。一つは契丹文字で陀羅尼を書いたもの、他の一つは佛菩薩を描いたもので、材料は何れも立派な大理石である。恐らく冥福を祈る爲に建立したものであらう。そして又、此處にもやはり、瓦や陶器の破片などが散亂してゐる所を見ると、一種の殿舎が附屬してゐたらしく、礎石のあとも現存してゐる。是等は何れも遼代の文化を見るの

に屈強の材料であると思ふ。

以上に述べた皇帝の墓に對して、一般庶民の墓は、どんな事に成つてゐたかと云ふと、それは組合せ石棺のやうなもので、火葬した骨を其中へ入れて葬つたらしい形跡がある。又、或る處には、石人・石虎・石羊等を列立させた墓もあつた。

なほ、あちらこちらには、小さな城跡、又、住居跡・寺のあとなども残つてゐる。碑文や陀羅尼幢なども随分方々に遺つてゐる。

そこで是等を綜合して考へて見ると、遼代には相當盛な文化のあつたことが想像されるのであつて、殊に當時佛教が盛に遼に行はれてゐたのは注意すべき事である。之を地方別で見ると、上京では主として密教が盛であつたらしく、同時に道教も行はれてゐるが、南方の南京とか中京とかの方へ行くと、華嚴とか其の他古來の傳統的な宗教の行はれてゐた事が、碑文なり又記録なりで知れる。又當時ネストリアンも入り込んでゐた形跡がある。此の事は、前から屢々予の注意した所であるが、今回も一つは皇城内、一つはハバチル廟へ行く途中の石室内で十字の印の彫り込まれてあるのを見た。又、滿洲に於ける遼代の遺跡ではメタルも發見されたし、古墳の中から土製十字を發掘した事もあつて、此の回の旅行に依つて尙一層從來の考へを確めることが出來た。これで見ると、唐代に榮えたネストリアンは遼代にも

やはり入つて來てゐるのである。

そこで遠代の宗教としては、シャマンが固有的であり、又基礎的なものではあるが、道教や、佛教（密教）も時を同じうして行はれ、なほネストリアンも多少行はれてゐた事が、これで知られるのである。現に予は是等の事を綜合して、論文を起草中であるが、此の會場でのお話はこれに止めて置くこととする。

農人形銅像の除幕式を壽きて

酒井爲太郎

みたからの姿をあふき見るたひに

朝な夕なのみうた貴ふとき

仰きみる農人形の銅像は

命の親の姿なりけり

今はそれ辛きおもひも消へはてし

ともに喜ふけふの嬉しき